

「疊字」の周辺

村井 宏栄 (名古屋大学大学院)

要旨

『色葉字類抄』の分類名目「疊字」について、辞書分類名目としての用法と一般的語彙としての用法から考察する。『色葉字類抄』の「疊字」は音読・訓読にかかわらず漢字二字以上という表記面からの名称であったが、他の辞書類において「疊字」の意味するところはこれに同じでない。全般的に音読熟語としての意味合いが強い上、語構成的に要素同士が類義関係にある語を指している場合(『下学集』)もある。辞書分類名目以外で用いられた「疊字」についても音読熟語という意味合いが強く、時に重点の語を含む場合が見られる。『色葉字類抄』—『下学集』—『節用集』という辞書史上の系譜を考えた場合、『節用集』が分類名目に「疊字」を用いなかっただのは、『色葉字類抄』以来の伝統的分類名目としての「疊字」の指示対象と、他の辞書類や一般語彙的用法の「疊字」の意味とに齟齬が生じるためと思われる。

一 問題の所在

『色葉字類抄』は院政期成立であり、語の第一音節によってイロハ順に配列された日本語辞書^(註1)である。その改編にあたっては語の分類・所属を整理しつつ発展していったことが知られる。いわゆる原形本^(註2)では、即物的な指示対象でない、「(非もの名)」の語の所属先として、詞字門^(註3)を立っていた。その後の改編にあたり、人事の意義にあたるものを人事

門として項目化し、残りの語彙については一字語を辞字門、二字以上で「X々」^(註4)の形の話(例「猗々・殷々・隠々・一々・家々・色々」)を重点門、「X々」以外(例「陰晴・陰雲・淫雨・如何・幾何・引唱」)を疊字門へと再編成していったことが推測されている^(註5)。

ところで辞書史上における分類名目「疊字」は、必ずしも『色葉字類抄』に同じでない。例えば室町時代成立の意義分類体辞書、『下学集』において「疊字」に配属されるものは次の語群である^(註6)。

疊字門 「第十八」

開關 滙際 連綿「不断ノ義也」 華美 華麗 秀逸 静謐 急速
規模 嚴重 嚴密 儉約 簡略 顯著 露頭 潔白 丁寧 鄭重 慙
勲 超過 超越 巨多 寛宥 経歴…(略)…歴々 濟々…(略)…

(元和三年版『下学集』・四四ウ三〇四五ウ二)

『下学集』における「疊字」とは、構成要素同士の字義が類義関係にある漢語あるいは音読疊語をいい、『色葉字類抄』にいう「疊字」とは内容が異なる。また、現代日本語にいう「疊字」とは反復符号(いわゆる踊り字)や疊語を指し、「疊語」とは同じ語基を重ねた語(以下「重点の語」)を指すことは周知の通りである。『色葉字類抄』以後、「疊字」という名称はその意味するところが変遷していき、最終的には『色葉字類抄』において「重点」が覆っていた部分に集約されていくのである。

古辞書における分類名目や書記に関わる術語の語誌については、これまでの研究によって解明されているとは言いがたい。本稿ではそのための試行の一つとして「疊字」を取り上げ、一般的語彙としての用法と辞書における分類名目としての用法とが相関していく様子を観察する。

考察の手順を先に述べると、まず『色葉字類抄』成立前後に辞書分類名目としての「疊字」が見られる古辞書の例を取り上げ、その指示範囲を明らかにした上で(第二節)、辞書分類名目以外での「疊字」と比較し(第三節)、「疊字」の意味用法の変遷を探る。その上で日本語辞書史における「疊字」の系譜についても言及する(第四節)。

以下「疊字」の指示範囲を考察するにあたり、特に音読／訓読の区別、重点の語を含む／含まないの二点に注意しつつ見ていくことにする。

二 辞書分類名目としての「疊字」

二・一 『韻字集』

『色葉字類抄』に先行して「疊字」が分類名目に用いられた辞書として、韻分類体の天理図書館蔵『韻字集』(仮題、平安後期成立か、鎌倉時代写、零本、七帖存、以下書名を『韻字集』とする。)が挙げられる。吉田金彦(一九六七)は『韻字集』を『本朝書籍目録』に著録される『詩苑韻集』一〇巻に比定し、その意義分類が『色葉字類抄』に影響を与えたとしている。『韻字集』は平声韻字のみからなる三二韻目の韻別辞書であったと推定される。韻目の下に意義分類を施し、意義分類下に該当の漢字を掲げ、その漢字を構成末尾に持つ熟語を掲出する。意義分類は次のとおりである(以下傍線・波線は筆者による)。

天象・地儀・植物・動物・人倫・人体・人事・飲食・雑物・光彩・方角・員数・辞字・異訓・重点・疊字・双貫・官職名・所名・人名・両音

『韻字集』には重点門・疊字門という、『色葉字類抄』にも見られる分類名目がいわれている。用例を示す。

重点

時々 期々「史」 遅々「春日」 祁々「丙」 熙々「春楽万物」
 崔々「山」 累々「堂」 菓々「草木葛稼」 駉々「龍馬」 駉々
 々「馬」…(略)…

疊字上「上平」

旬時 京坻 巖 藩維 威夷「路」 〓「山冠十留」 疑「草／殿」
 一 蒨葵「扇」 菝「草」 荊「本草獨葵一名」 茅茨…(略)

〔『韻字集』脂之韻疊字門〕

『韻字集』疊字門は内部でさらに上平声／下平声に分類するが、重点・疊字・双貫という序列の後に「三字疊字」「同四字」が続く場合がある。疊字門内部に双貫門が挿入されていて、双貫門は疊字門の一部であると見ると、二字語掲出が原則となる重点・疊字・双貫の序列において「三字疊字」「同四字」は同等には並ばない付属的なものと見るのかによっても「疊字」の意味が変わってくる。

『韻字集』は零本でもあることから限定しがたいが、前者の視点から考えると、『韻字集』における「疊字」とは漢字二字以上の熟語ということになる。ただし二字熟語においては構成要素同士が類義関係にあるものを指しており、語構成的に限定されたものの名称となる。

さらに『韻字集』は韻書であることから、特に音読が意識されていたと

考えられる。重点門が存在することからも分かるように、『韻字集』において重点の語は「疊字」の範囲に含まれていないことが注意される。

二・二 『塵袋』

鎌倉時代末期成立かとされる語源辞書、『塵袋』においても分類名目としての「疊字」が用いられる。『塵袋』は全体を意義によつて分類し、問答体によつて語源を解釈する。意義分類を左に示す^(注六)。

- ・天象・神祇・諸国・内裏・地儀・植物・草・鳥・獸・虫・人倫・人体
 - ・人事・仏事・宝貨・衣服・管絃・雑物・飲食・員数・本説・禁忌・
- 詞字・疊字

分類の末尾に詞字(巻一〇)・疊字(巻一一)が見られる。この両者について、前者には和語を、後者には漢語をとという分類意識が濃厚である^(注七)。左に両巻の目録部分を示す^(注八)。

- 一 ハチキヨムト云ニ雪恥トカク事
- 一 進退キハマルト云ニ谷ノ字ヲカク事
- 一 アナカシコトハイカナル心ソ
- 一 白^{ハク}地トハカリソメト云ニ心歟
- 一 八稜ト八角ト同心歟
- 一 ニナフトハカタニカクルヲ云フ歟
- 一 モノ、ウスキヲヘエノトアルト云事
- 一 人^{ヒト}ネサスルヲシナスト云事
- 一 タハカルト云フ事ハタフロカス歟
- 一 コチタキト云フ何ナル心ソ
- 一 シウネキト云フ字ノ正字如何

- 一 トモカクモト、左右ノ字歟
 - 一 モドクトソノ心如何
 - 一 ナカラフルト云フ詞ハ長心歟 ……(以下略)
 - 一 安堵スルト云コトハ堵ノ字何ノ心(ソ)
 - 一 雷(同)カキテヒタノクトヨム何ノ心ソ
 - 一 省察ト云フハハ(フク)心歟
 - 一 管見ト云コトハ其ノ説如何
 - 一 従容^{ツウカ}、フト云フ何事ソ
 - 一 刊定ト云フコトハ其ノ心如何
 - 一 万流ト云フヨロツノ河ヲ云フ歟
 - 一 経始ト云フ草創ト云フ同心歟
 - 一 高第ト云フハナニノ心ソ ○
 - 一 (欄外) 一 文献タラスト云フハイカナル心ソ
 - 一 キミヲイサメ奉^{ホウ}狂^{キヤウ}馨^{シヤウ}献^{ケン}ト云事
 - 一 廻翔ト云フハ鳥ノ如クニマヒカケル心歟
 - 一 幽閑セラルトハ何ニ事ソ ……(以下略)
- 『塵袋』卷一一疊字・内表紙ウ一〇七
- 『塵袋』における「疊字」とは、二字以上の音読熟語を指すものである。かつ『塵袋』疊字門には重点の語をテーマとした問答の項目も含まれることが注意される。
- 一 巍々堂々ト云フハイカナル心ソ
- 『塵袋』卷一一疊字・二四ウ六

二・三 『平他字類抄』

『平他字類抄』は正安二(一三〇〇)年頃成立の韻書であり、内部構造がやや複雑である。上中巻がいわゆる『平他字類抄』本体で、下巻が「平他同訓字・随読平他字・両音字」となっている。巻下の「平他同訓字」内に意義分類が施され、

天地 植物 動物 人倫 人体 人事 飲食 雑物 光彩 方角
員数 詞字 重点 疊字

と、明らかに『色葉字類抄』の分類名目と似通った序列となっている。重点・疊字門の用例を示す。

重点

明(平)々「皓(去)々」 迢(平)々「眇(平)々」

疊字

任(平)「遮莫」 如(平)何(平)「其奈」 何(平)因(平)

縁何「縁底」 由(平)来(平)「本自」 宜(平)哉(平)「宜

矣」 説言「聞遣」 猗(平)哉「椅矣」

(京大本『平他字類抄』巻下・平他同訓字四ウ)

疊字門に配属される掲出語と直下の熟語とは、それぞれ後部構成要素の平仄が異なる関係にある。すなわち「任他」であれば、後部構成要素の「他」字は平声であるが、直下の「遮莫」において「莫」は入声となり、求めたい平仄によって用字の選択が可能となるのである。

『平他字類抄』が韻文作成に関わる書であることは確實であり、傍訓が記されているものの、字音が意識されていたものと思われる。他に重点門が見られることから、重点の語は「疊字」の範囲に含まれない。

二・四 『下学集』

第一節にも述べたが、『下学集』における「疊字」とは、構成要素同士の字義が類義関係にあるもの、あるいは重点の語をいう。『下学集』の意義分類配列は左の通りである。

天地・時節・神祇・人倫・官位・人名・家屋・気形・支体(上巻)
態芸・絹布・飲食・器財・草木・彩色・数量・言辞・疊字(下巻)

『下学集』では「言辞」と「疊字」が区別される。この二者の区別について、近世版本では左のように明記される。

言辞 常二人ノイ、アツカフ言葉ヲ入ル

疊字 同ジヨミノ字又ハ同ジ心ノ字の連続カサナリタル字皆此門ニ入

41 (岩瀬文庫蔵『真草下学集』(五二))

『下学集』疊字門は音読語のみを収録するが、重点の語をも含むものである(「歴々 濟々(一四七丁)」。)

ここまで、辞書分類名目としての「疊字」の指示範囲を確認した。『色葉字類抄』の「疊字」は音読か訓読かの区別にかかわらず、二字以上の熟語という表記面からの名称であり、三巻本では疊字門内部で字音注記部と字訓注記部とに分類・配列がなされる。しかし他の辞書における「疊字」はこれに同じではない。『韻字集』・『塵袋』・『平他字類抄』・『下学集』と、計四辞書における「疊字」は、すべて音読熟語、あるいは字音が強く意識されていた語であると言える。加えて『韻字集』における二字熟語や『下学集』においては、構成要素同士が類義関係という語構成的に限定されたものを指している場合がある(五二)。その意味において『色葉字類抄』のみ異質である。

分類名目としての「疊字」を比定するためには、さらに分類名目以外に用いられた「疊字」の用法からも考えなければならぬ。次節では一般語彙的用法における「疊字」を検討する。

三 辞書分類名目以外での「疊字」

三・一 『作文大体』

『作文大体』は平安中期成立であり、漢詩文制作に必要な知識を類聚した詩学書である。本書は成立以後改編・増補を重ねていくが、群書類従本では「文章有二十二対」として、文章に用いる対句技巧が語例・句例とともに列記される。その中の「第十二双対」とされる部分に、「疊字」に関する文言が見られる。

文章有二十二対 「詩賦雜筆等同用之。」

一色対。二物対。三同対。四異対。五数対。六疊対。七連綿対。八正

対。九音対。十傍対。十一義対。十二双対。…(略) …

第十二双対

隔衆字二用同疊字是也。

句云。華色遠依華色映。鳥音深和鳥音歌。

(群書類従本『作文大体』四九四頁)

双対、すなわち「一句中に同じ(疊字)をくり返す対句」とすることができよう。右において「疊字」とされるのは「華色」・「鳥音」であると思われる、これらは音読された可能性が強いと想像される。「文章有二十二対」には、他に「第六疊対」として重点の語を用いた句法が挙げられることから、『作文大体』にいう「疊字」とは、重点の語を除いた(音読の可

能性が強い)二字熟語、ということになる。

三・二 『名語記』

『名語記』は鎌倉後期成立の語源辞書である。当時の日常語について、問答体によって語源を説く。語源解釈にあたっては仮名反切や音通を多用する。左に例を挙げる。

問 イロアカキ物ヲニトナツク如何 答 ニ丹也 ネチツ反せ、ニ也

熱也 アツキ物、アカキ物、アカキ 色ニカタレリ 火モアカシ

日モアカシ 血モアカシ コノ丹ヲ訓ニ、ニトイヒ 音ニヨミテ、タムト

イヘル 絵、具ニ、各別、物也…(略)… 『名語記』卷二・八才)

問 船ノトマリツトナツク如何 答 ツ、津也 ツクツ反せ、ツ也 付

也 着也 又云 トムツ反せ、ツ也 留也 又富也

『名語記』卷二・三〇才)

これらの問答においては、「ネチ(熱)」を仮名反切することによって「ニ(丹)」を、「ツク(付・着)」・「トム(留・富)」を仮名反切することによって「ツ(津)」を導きだし、それぞれ語源を説いている。『名語記』の語源解釈において、仮名反切は和語に対しての手段であり、漢語に対しては通常用いない。

問 理致トイヘル如何 答 リチ、道理ニカナヘルヨリヨシ、疊字也

リノイタリ也 『名語記』卷三・三八才)

ところで興味深いのは、問答の解答者がある語について、疊字であるという理由によって仮名反切を採用しない例が多く認められる点である。

問 トリメアル事、エコトナツク如何 答 エコ、依怙、カケリ ヨリ

タノム、字也 コレ、疊字ナレ、反音、尺ニヲヨハス

『名語記』卷五・九〇ウ

問 物沙汰、サタ 如何 答 疊字、反、分、非ス 但イサコ、ユルト、イ
ヘル字也：(略)： 『名語記』卷六・一六ウ

次 男女和合スル、ハサ、ナツク如何 ソノハサ、磨礎、カケル歟 疊
字ナレ、反、沙汰、ヲヨハス 配隅、ヨレル歟 『名語記』卷三・九ウ

それぞれの問答のテーマとなることばについて、疊字であるから仮名の
反音(反)、すなわち仮名反切には適さないと解答者は言う。ここにいう
「疊字」とは、音読されることが前提となる漢字熟語のことである。

加えて左の問答では、「シヤク(笏)」は一字であるから疊字ではない
が、音読するので疊字と同じく仮名反切には及ばないと説いている。『名
語記』における「疊字」とは、二字以上の熟語であつて音読の語、という
定義が明らかである。

次 俗、出仕、モツ シヤク如何 笏、カケリ 疊字ナラヒ、一字ナレト
音、ヨミ、アラハレヌルヲハ、カヘシ尺スル、ヲヨハサルヨシ カネ
テ 申ヲキ侍ヘル所也 『名語記』卷八・一二二オ

そして次の例で明らかのように、重点の語が「疊字」の範疇に含まれて
いることも注意される。

次 峨々如何 山、サカシキ 疊字也 『名語記』卷四・一五ウ
次 イソカヌ心、ユ、トナツク如何 ユ、疊字也 悠々、油々、カケ
ル歟 『名語記』卷六・四六オ

三・三 『太平記』

西源院本『太平記』においても「疊字」が見られる。次の用例は凋落し
た朝廷への比喩の表現として用いられる。「意得カタノ疊字ヤ」と欺く人

物が「蛮夷」である。

曲水重陽之宴モ絶ハテ、白馬踏歌之節会モ行レス、禁園仙洞サヒカ
ヘリテ、参仕拜趨之人モ希也ケリ、況ヤ朝廷ノ政、武家之計ニ有シ
カハ、三家台輔モ奉行頭人之前ニ媚、五門ノ曲阜モ執事侍、所ノ辺ニ

マイナフ、サレハ納言宰相ナントノ言ヲ聞テモ、意得カタノ疊字ヤ
ト欺キ、庭尉北面之道ニ行合タルヲ見テモ、ハヤ例ノ長袖垂タル俎
鳥帽子ヨト云ヒ、 (西源院本『太平記』卷二「蛮夷階上事」)

和語であれば語の意味を想起しやす。い。「納言宰相」の発語内容が不明
であるため「疊字」の指すものは明らかでないが、語義を想起しにくい字
音語を指すのではないかと疑われる。

三・四 疊字連歌

室町時代、連歌の世界において疊字連歌が流行する。疊字連歌は各句に
疊字を詠み込んだ連歌様式のことである。

真実の花とは見えす松の雪 (応永二十年疊字連歌・発句)
夏草にはな逸興のさゆり哉 (連歌合集二九・発句)
いつよりか水は氷に遅々すらん (賦疊字連歌・七句)

本来和語を以て詠まれる純正の連歌に対し、句中に漢語を詠み込んだと
いう点に面白みがあったのであろう。作品には内閣文庫蔵「賦疊字
連歌」・河野信一記念文化館本「疊字連歌」・天理図書館蔵「応永二十年
疊字連歌」・東山御文庫蔵「宗祇独吟百韻」・統群書類従本「文章連歌五
十韻」等が知られる。

ここまで、辞書分類名目以外の「疊字」についても見てきた。辞書分類

名目以外で用いられる「疊字」はおおよそ二字以上の音読熟語を指すと思われ、『名語記』のように重点の語を含むものも見られた。加えて語源問答においても用いられ(『名語記』)、室町期には疊字連歌の名で文芸様式として知られていくことから、辞書分類名目のみに用いられる伝統的術語ではないということも確認できた。

第二節で確認した、辞書分類名目としての「疊字」と比較にしても、大きな偏差は見られない。すなわち、辞書分類名目としての「疊字」が「詞字」・「言辭」などの分類名目と並立しながら音読熟語を意味していた傾向と同じく、分類名目以外での「疊字」も、時に重点の語を含みつつ音読熟語を指しているという傾向が明らかになった。その意味で、やはり『色葉字類抄』のみ異質であるといえる。このような結果を踏まえ、次節では辞書史上の位置付けから考察する。

四 『色葉字類抄』から『下学集』、『節用集』へ

『色葉字類抄』はその組織を再編成しつつ異本を生み出していった辞書である。三宅ちぐさ(一九八二)は諸本の登載語収録状況により、いわゆる原形本における詞字門が改編後の諸本において人事・辞字・疊字の各門へと分化していくことを論じた。

二字以上の漢字熟語を何らかの基準によって分類し直そうとしたとき、『色葉字類抄』では「々」を持つものは重点門へ、それ以外は疊字門へという方法が採られた。意義分類の中であえて形態面・表記面による分類方法を選択したのは、収録された漢字熟語に用言を含む抽象概念語が多く、さらなる意義分類が不可能と判断されたためであろう。

後代に至り、『下学集』の一本から『節用集』が生まれたとき、その意義分類にはもう「疊字」の名称は用いられない。

〔伊勢本系〕

文明本：天地・家屋・時節・神祇・人倫・人名・官位・気形・支体・飲食
・ 絹布・器財・光彩・数量・態

饅頭屋本：天地・時節・人倫・官名・生類・草木・財宝・食物・支体・雑用

明心五年本：天地・時節・人倫・人名・官名・支体・財宝・食物・草木・畜類・光彩・言語進退・数量

伊京集：天地・時節・草木・人倫・官名・人名・人体・畜類・財宝・衣服
・ 食物・数量・言語進退

増刊節用集：天地・時節・人倫・人名・畜類・草木・衣服・器財・支体・言語

正宗文庫本：天地・時節・草木・人倫・身体・官名・人名・畜類・財物・衣服・飲食・言語進退

〔印度本系〕
弘治二年本：天地・時節・草木・人倫・人名・官名・支体・病名・畜類・財宝・衣服・食物・数量・言語進退

黒本本：天地・時節・草木・光色・人倫・官名・人名・支体・畜類・財宝
・ 食物・衣服・数量・言語

〔乾本系〕
易林本：乾坤・時候・官位・人倫・人名・支体・草木・気形・衣服・数量
・ 神祇・名号・器財・言辭

古本『節用集』の分類名目は諸本によって異同が見られ、また一文献内

においても意義分類の名目・序列にゆれが認められる場合が多くあるが、おおよそ右のようになる。いずれにおいても「疊字」という分類名目はいられていない。『色葉字類抄』や『下学集』において疊字門に配属されていたような語は、古本『節用集』では「言語・言語進退・言辞・態芸・雑用」等の名目下に配属されていくのである。

慇懃「インキン／苦詞也」

(三卷本『色葉字類抄』イ疊字・上一三才五)

慇懃 (元和三年版『下学集』疊字・四四〇七)

慇懃 (文明本『節用集』ヲ態芸・二二七・六)

慇懃「態也」 (『伊京集』イ言語進退・四・一)

慇懃 (明応五年本『節用集』イ言語進退・七・四)

慇懃 (易林本『節用集』イ言語・五才五)

徘徊「ハイクワイ／行歩分」

(三卷本『色葉字類抄』ハ疊字・上三三才六)

徘徊 (元和三年版『下学集』疊字・四五才一)

徘徊 (文明本『節用集』ハ態芸・八〇・六)

徘徊「往來貌也」 (『伊京集』ハ言語進退・九・八)

徘徊 (明応五年本『節用集』ハ言語進退・一九・一)

徘徊 (黒本本『節用集』ハ言語・一七・四)

徘徊 (易林本『節用集』ハ言語・一一ウ六)

徘徊 (饅頭屋本『節用集』ハ雑用・一六・一)

『節用集』においては『色葉字類抄』以来の伝統的辞書分類名目であった「疊字」を用いなくなり、かつ「辞字・重点・疊字」(『色葉字類抄』、

「言辞・疊字」(『下学集』)など分割していた部立てを「言語」等の名目下に一括していくようになる。『節用集』はイロハ分類―意義分類という構造を持ち、その意味で『色葉字類抄』に等しい。しかし『節用集』が「疊字」を名目として用いなかったのは、音読語という意味合いの強い、一般的語彙としての用法の存在や、『色葉字類抄』以外の辞書分類名目における「疊字」が意味するところとの齟齬のためと考えられる。

また「言語」等の名目を採ることによって、『節用集』は「天地・時節」に始まり「数量・言語」へと至るすべての名目が意義を表すものへと統一が図られることとなった。前代までの「疊字」における、意義分類といながらも名目自体が意義を表していないという矛盾がようやくここに解消されたのである。

五 まとめ

本稿では『色葉字類抄』の分類名目「疊字」について、辞書分類名目としての用法と一般的語彙としての用法から考察を加えた。

辞書分類名目としての「疊字」も、分類名目以外に用いられた「疊字」も、共に『色葉字類抄』以外では音読熟語という意味合いが濃厚である。

加えて、分類名目としての「疊字」は、時に構成要素同士が類義関係という意味を持つ場合(『下学集』・『韻字集』二字疊字)も認められる。

『色葉字類抄』―『下学集』―『節用集』という辞書史上の系譜を考えれば、『節用集』が分類名目に「疊字」を用いなかったのは、『色葉字類抄』にいうような伝統的辞書分類名目としての「疊字」の指示対象と、『色葉字類抄』以外の辞書分類名目や一般的語彙としての「疊字」とに齟

齋が生じるためであったと思われる。

やがて「疊字」はその意味するところが重点の語・反復符号（踊り字）に限定されていくのであるが、それは近世以降のことである。

同字を重ねたるを。疊字と云。又重文^{オウブン}とも云。和に是ををくり字と云。又をどり字と云。片仮名には。ズ、サラ、くなど書く。平仮名には。ズ、さら、くなど、書く。

（文雄『和字大観鈔』巻下「疊字式」一四丁）

注記

注一 いわゆる古辞書には多様なものがあり、当該文献の構造・目的などによ

って「字書・韻書・類書・辞書」などと呼び分けるが、本稿ではこれらを区別せず、総称して「辞書」と呼ぶ。

注二 川瀬一馬氏蔵鎌倉時代古鈔本、千篇地儀門→千篇雜物門までが現存する
 零本。天象・地儀・人倫・人体・動物・植物・雑物・飲食・員数・光彩
 ・方角・詞字の二二門を有する。

注三 本稿では各辞書類の意義分類の部立てについて、「門」の呼称を用いる。
 また「重点」「疊字」など、厳密には意義による分類でないものを含んで
 いても「意義分類」と総称する場合がある。

注四 本稿では重複符号の形態は区別せず、以下「々」で代表させる。

注五 三宅ちぐさ（一九八二）参照。なお、『色葉字類抄』重点門の項目化につ
 いては村井宏榮（二〇〇二）に述べた。

注六 以下用例引用に際し、注記は「」内に示し、注記が改行される場合は／で
 示す。特に論に関わらない注記は省略する場合がある。

注七 吉田金彦（一九六七）は『韻字集』の疊字門の語を、「字は異なるが類似

または同等の意味をもつ語（字）を二つ重ねた熟語である。」としている。

注八 川瀬一馬（一九五五）によると、『塵袋』は意義分類全体を通して『色葉
 字類抄』の影響を受けているという。

注九 ただし、「下臈ノコトハ」（巻一〇・六才二）、「世俗ノコトハ」（巻一〇・
 九ウ二）など、『塵袋』の詞字門には口頭言語性を感じさせる記述が見ら

れる（疊字門には見られない）。『塵袋』における詞字門―疊字門の対立
 は、口頭言語―書記言語のような位相でもとらえうるが、ここでは訓読
 ―音読という語の外形面で考えておく。

注一〇 〇内は虫損により判別不能箇所である。使用テキストの翻字本文によ
 って補う。

注一一 寛文六年版、上下二冊。

注一二 このような語を部立てとして設けていることは、たとえば文字数に制約
 のある韻文作成などに利用の場が求められるであろう。

注一三 ただし、中には音読熟語を含まない句も存在している。

柳の眉目^{マユメ}はけに今の時（宗祇独吟百韻・二句）

其後よりの雪のとをやま（文章連歌五十韻・一〇句）

なにゆへに抑月のかすむらん（賦疊字連歌・三句）

この点について、岩下紀之（一九八二）は「何と言っても疊字連歌が気
 楽な作品であって、こうした逸例をも許容しうる形態であったというべ
 きなのである」としている。なお、岩下（一九八二）は疊字連歌の「疊
 字」を収集し、索引化している。左に一部を示す。

予（アラカジメ） 案内（アンナイ） 以後（イゴ） 遺恨（イコン） 委
 細（イサイ） 聊（イササカ） 意趣（イシユ） 一期（イチコ） 一切（イ

ツサイ) 一旦(イツタン) 一篇 遠愛(イヘン) 隠居(インキヨ)
 音信(インシン) 雨中 胡乱(ウロン) 有名無実(ウミヤウムシツ)
 永日(エイジツ) 英雄(エイユウ) 永楽(エイラク) 依怙(エヒ)
 会尺(エシヤク) 悦喜 厩弱(ワウシヤク) 往生(ワウシヤウ) 仰
 (ヲホセ) 越度(ヲツド) 慇懃(ヨシコン) 隱蜜(ヲシミツ)

使用テキスト

色葉字類抄 『尊経閣善本影印集成18色葉字類抄三卷本』 八木書店 一九九九

『色葉字類抄研究並びに総合索引黒川本影印篇』 風間書房 一九

六四

韻字集 天理図書館蔵

下学集 古辞書叢刊『元和三年板下学集』 新生社 一九六八

岩瀬文庫蔵『真草下学集』 寛文六年版

作文大体 新校群書類従本

節用集 文明本・伊京集・明応五年本…古辞書大系本、饅頭屋本…『饅頭屋

本 節用集』(白帝社 一九六一) 易林本…天理図書館善本叢書本

太平記 『西源院本太平記』 刀江書院 一九三六

塵袋 『印融自筆本重要文化財 塵袋とその研究』 勉誠社 一九九八

平他字類抄 『京大本平他字類抄』 臨川書店 一九七三

名語記 北野克『名語記』 勉誠社 一九八三

和字大観鈔 筑波大学附属図書館蔵本 寛政七年版

疊字連歌 天理図書館蔵「応永二十年疊字連歌」…天理図書館善本叢書和書の

部二二『古俳諧集』(八木書店 一九七四)、国会図書館蔵連歌合集二九所収「疊

字連歌」…岩下紀之「連歌合集二九に収められた疊字連歌について、また後奈
 良天皇の歓喜天信仰のことなど」(『愛知淑徳大学国語国文』八 一九八五)、
 後『連歌史の諸相』(汲古書院 一九九七)に採録、内閣文庫蔵「賦疊字連歌」
 …伊地知鐵男「花の本連歌の興行は禁止された・二条良基の疊字連歌一巻」(『中
 世文学』一五 一九七〇)

引用・参考文献

岩下紀之 一九八二 疊字連歌疊字索引稿、『愛知淑徳大学論集』八(『連歌史

の諸相』汲古書院、一九九七に収録)

尾崎雄二郎 島津忠夫 佐竹昭広

一九八五 『和語と漢語のあいだ―宗祇疊字百韻会説―』筑摩書房

川瀬一馬 一九五五 『古辞書の研究』講談社、一九八六増訂再版、雄松堂

三宅ちぐさ 一九八二 いろは字類抄における意義分類の変遷とゆれ、『岡大国文

論稿』一〇

村井宏栄 二〇〇二 『色葉字類抄』重点門の項目化、田島統堂・釘真亨編『名

古屋大学日本語研究室 過去・現在・未来』

吉田金彦 一九六七 詩苑韻集の部類立てと色葉字類抄類『本邦辞書史論叢』

三省堂

〈付記〉本稿は第二三〇回名古屋・ことばのつどい(於名古屋大学文学部、二〇
 〇一年五月二六日)において、「三卷本色葉字類抄における「疊字」について」と
 題して口頭発表を行った内容に基づくものである。席上、多くの方より貴重な御
 意見・御教示を頂いた。記して深謝申し上げる。